



近代に西洋画と対する概念として生まれた「日本画」は、今もなお進化を続けています。彩色には岩絵具や墨、支持体には絹や紙、表装には軸・額・屏風・卷子と、その技法や形式は実に多岐にわたります。

1997年に開館した当館は、^{こすぎほうあん}小杉放菴（1881-1964）の作品を中心に近代日本画の収集に努めてまいりました。そもそも、西洋画から画家としての道を歩み始めた放菴ですが、30歳頃に日本画の制作に軸足を移し、その後、^{まし}麻紙と出会ったことにより、独自の画風を切り拓きました。

さらに、2000年代には、美術大学の油画科を卒業しながらも、日本画の画材・岩絵具を用いて制作する^{きくちたけひこ}菊地武彦（1960-）や、自らを「超・日本画家」と称し、アクリル絵具など現代に生まれた画材を用いて制作する^{まじまひでのり}間島秀徳（1960-）など、現代のアートシーンを代表する画家の作品を収蔵する機会にも恵まれました。

本展は、当館所蔵の近代から現代に至る日本画を、「支持体」「色」「表装」の3つの視点から紹介することにより、その広く深い魅力に迫るものです。

■ 開催概要 ※新型コロナウイルス感染症の状況により、会期等が変更になる場合があります。

会期：2021年11月20日（土）～2022年1月23日（日）

休館日：毎週月曜日（ただし1月10日は開館）、1月11日（火）

年末休館 12月29日（水）～31日（金）

年始休館 1月4日（火）～6日（木）

開館時間：9時30分～17時（入館は16時30分まで）

入館料：一般730（650）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料

※（ ）内は20名以上の団体割引料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料

※第3日曜日「家庭の日」（11月21日、12月19日、1月16日）は、大学生は無料

※1月1日（土・祝）は入館無料

主催：公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会

■ 展覧会構成 ※掲載作品はすべて小杉放庵記念日光美術館蔵

プロローグ

空とも波濤とも見えるこの作品。(図1) 横幅 35 センチ余りの小さな作品ではありますが、見る者に壮大なスケールを感じさせます。

ところで、この作品、額などには収められておらず、パネルのまま展示されます。

この作品を制作したのは、間島秀徳 (1960-)。彼は、自らを「超・日本画家」と称し、伝統的な画材・岩絵具を用いつつも、アクリル絵具など現代に生まれた画材のほか、水や川砂なども制作に用います。

この作品を手がかりに、「支持体」「色」「表装」という3つの視点で、これから日本画の魅力を探りましょう。



図1 間島秀徳《Kinesis No.407 (Bakufu Un)》
2009年、紙・墨／顔料など、パネル

1 支持体

日本画の支持体には、「絹本」(図2)「紙本」(図3)の2つが挙げられます。絹本は地が美しく、発色に大変優れており、仏画をはじめ古くから用いられてきた支持体です。

一方の紙本も古くから用いられていたものの、支持体の主流となったのは大正時代のことでした。日本では室町時代以降、紙は中国からの輸入に頼っていましたが、清朝末期の混乱からその質が低下したことで、国産紙製造の気運が高まります。その立役者となったのが、越前の紙匠・岩野平三郎^{いわのへいざぶろう} (1878-1960) で、彼は画家の求めに応じて多くの画用紙を漉きました。そして、1928 (昭和3) 年には歴史学者・内藤湖南^{ないとうこなん}らの助言を得て、平安時代に姿を消した「麻紙」^{まし}の復元に成功したのです。



図2 小杉放庵《清風明月》
1930年代、絹本・着色、軸装

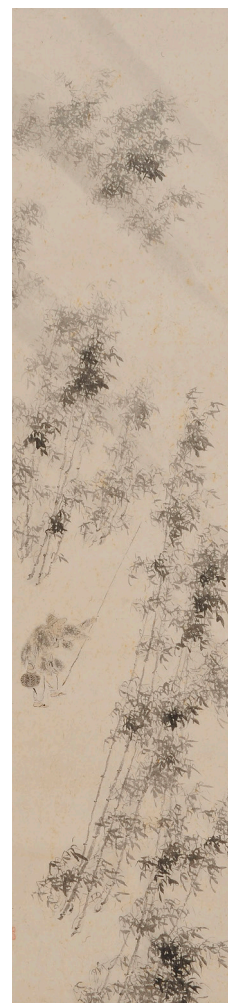


図3 小杉放庵《竹雨》
1937年頃、紙本・着色、軸装

放菴は後半生、新潟・妙高高原に生きる野鳥の姿を題材にした花鳥画(図4)を手がけるようになりますが、この岩野特製の麻紙が花鳥画成功の大きな理由の一つでした。非常に薄く、麻の繊維によって墨が大きくにじむという難点を持っていましたが、この繊維は鳥の羽毛の柔らかさを表すのに大変適していたのです。

地が滑らかで発色に優れた絹と、繊維によって独特の風合いを出す紙—その違いをお楽しみください。



図4 小杉放菴《辛夷にうそ》
1940年代前半、紙本・着色、額装

2 色

岩絵具は、日本画制作に用いられる伝統的な画材です。その名前の通り、鉱石を粉碎したことにより作られる岩絵具は、近世までは藍銅鉱による群青と孔雀石による緑青の2種類のみでしたが、近代以降は新たな鉱石によって幅広い色が生まれました。

菊地武彦(1960-)は、美術大学の油画科を卒業しながらも、制作に岩絵具を用いる画家です。岩絵具に惹かれる理由の一つとして彼は、天然の鉱石を原料としていることを挙げています。目を凝らして彼の作品(図5)を見ると、大小様々な粒子で構成されており、大きな粒子は石を、細かな粒子は砂と、原料である鉱物を見る者に思い起こさせます。

もう一つ、日本画制作で欠かせないのが、「墨」です。黒一色と思われがちな墨ですが、「墨に五彩あり」ということばがあるように、濃淡などによって様々な表情を見せます。

このコーナーでは、伝統的な画材である岩絵具と墨を用いた作品をはじめ、現代に生まれたアクリル絵具などを用いた作品もならべ、日本画の多彩な色をご覧ください。

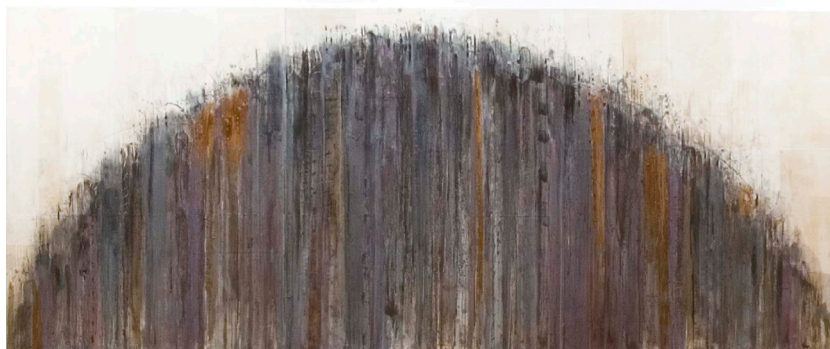


図5 菊地武彦《線の気韻 1993-9》
1993年、紙本・着色、パネル

3 表装

表装の多彩さも、日本画の魅力の一つです。古くから伝わるものとして、仏画や肖像画に用いられた軸装や、絵巻物に代表される卷子、住居の仕切りでもあった屏風（図6）などが挙げられますが、近代以降は西洋画や住居の洋風化の影響、また保存上の観点から額装の日本画が多くを占めるようになります。

どうしても絵に目が向きがちですが、表装も日本画を楽しむ大きなポイントと言えます。例えば、ゆったりと泳ぐ鯉を描いた小杉放菴の《柳》（図7）の絵の周りには水面のような模様の裂地^{きれじ}が、上下の絵の際に貼られた一文字^{いちもんじ}にはアメンボ模様の裂地があしらわれており、絵と表装で一つの風景が作られています。ところが、現代では先に紹介した間島のように、表装をしない日本画も制作されています。

古くから伝わる表装、そして新しい表装—その様々な形をお楽しみください。



図6 小杉未醒（放菴）《中国神話図》
1916年頃、絹本・着色、屏風

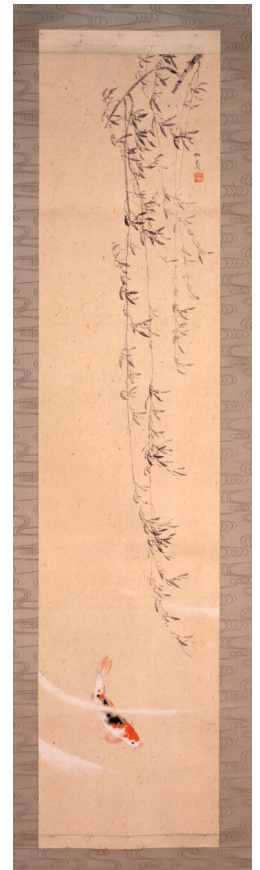


図7 小杉放菴《柳》
1940年代、紙本・着色、軸装

■ 会期中のイベント

・担当学芸員によるギャラリートーク（予約不要・要入館料）

11月21日（日）、12月19日（日）、1月16日（日）

各日 11時～（1時間程度）

・ミニコンサート「新春 邦楽の調べ」

1月2日（日）13時30分～／15時30分～

（各回 30分程度）

出演：津上弘道氏（尺八演奏家）

藤重奈那子氏（箏・地歌三味線演奏家）

曲目：春の海 五段砧 ほか

参加費：無料

■ 本展に関するお問い合わせ先

小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 栃木県日光市山内 2388-3

Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-1201

担当学芸員：清水友美

E-mail: shimizu-tomomi@khmoan.jp

「大解剖！日本画のミリョク」展 広報用画像申込書

FAX: 0288-50-1201 E-mail: shimizu-tomomi@khmoan.jp

小杉放菴記念日光美術館 清水行

■ 画像使用に際してのお願い

- ご希望の図版の左枠内に ☐ を入れて、FAX かメールにてお送りください。
(リリース中の図版に付された1～7が、図版番号です)
- 使用目的は、本展のご紹介のみに限ります。
- 画像は、原則、全図でご使用ください。トリミング、部分使用、文字のせは無断で行なわないよう、お願いいたします。
- 掲載する場合は、各画像のキャプションを必ず記載してください。
- 画像のご使用は1申込につき1回とし、使用後のデータは破棄してください。
- 基本情報確認のため、展覧会担当まで必ず校正紙をお送りください。
- 掲載見本を展覧会担当までご送付いただきますよう、お願いいたします。

☐	No	キャプション
☐	1	間島秀徳《Kinesis No.407 (Bakufu Un)》2009 年、小杉放菴記念日光美術館蔵
☐	2	小杉放菴《清風明月》1930 年代、小杉放菴記念日光美術館蔵
☐	3	小杉放菴《竹雨》1937 年頃、小杉放菴記念日光美術館蔵
☐	4	小杉放菴《辛夷にうそ》1940 年代前半、小杉放菴記念日光美術館蔵
☐	5	菊地武彦《線の気韻 1993-9》1993 年、小杉放菴記念日光美術館蔵
☐	6	小杉未醒（放菴）《中国神話図》1916 年頃、小杉放菴記念日光美術館蔵
☐	7	小杉放菴《柳》1940 年代、小杉放菴記念日光美術館蔵

貴社名： _____

媒体名： _____

ご担当者名： _____

TEL： _____

FAX： _____

E-mail： _____